

日本手話のいわゆる動詞句削除現象 —非手指表現に注目して—

上田 由紀子 (山口大学)

内堀 朝子 (東京大学)

要旨

日本手話をはじめとする手話言語においては、副詞的修飾表現が非手指表現として他の手指表現と同時に現れる場合があることが広く知られている (Sandler and Lillo-Martin 2006、岡・赤堀2011)。本稿では、日本手話において、VP様態副詞的修飾表現の構成素である非手指表現が、手指表現である動詞に波及して両者が同時に現われているとき、動詞句内要素の語順が一定の制約を受ける事実を観察する。また、当該副詞的修飾表現の非手指表現は、同じ副詞的修飾表現のもう一つの構成素である手指表現と動詞とが線状的隣接条件及び構造的階層性条件を満たすときにのみ、動詞に波及して両者が同時に現われることができると指摘する。さらに、これらの事実から、日本手話において、先行文中にVP様態副詞的修飾表現を含み、それに後続する文の動詞句内で目的語が空となっている場合、動詞が語彙動詞であれば項削除が、動詞が代動詞であれば動詞句削除が生じているという分析を提案し、これらの文ではV-T主要部移動が起きていないことを示唆する。

キーワード：本手話、非手指標識の波及、隣接性条件、空目的語、動詞句削除

1. はじめに

本稿では、まず、日本手話におけるVP様態副詞相当表現の外在化について、すなわち、当該副詞的修飾表現を成す形態素が実際にどのような出力を用いてどのように具現化されるかについて観察する。¹特に、音声言語にはない、手話言語に特有の文要素の「同時外在化特性」に着目する。ここで言う手話言語の「同時外在化特性」とは、手指および非手指(手指以外による表現: Non-Manual (NM))の少なくとも2つ以上の出力手段を使って、異なる要素を同時に外在化、具現化できるという特性である。例えば、音声日本語では、「丁寧に洗う」と言う意味を表現する際、「丁寧に」と「洗う」を同時に発話することはできない。

線状的隣接条件が必要であることを指摘する。また、日本手話において、一見、動詞残留型の動詞句削除が生じていると思われる構文では、動詞が語彙動詞の場合は、動詞句削除ではなく、項削除が関わっていることを示す。さらに、VP様態副詞の非手指表現の波及には、線状的隣接性だけでなく構造的階層性条件も関与していることも示唆する。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、本研究に関連する日本手話の基本特性をまとめる。3節では、VP様態副詞の非手指表現の波及と様態副詞・目的語・動詞の語順を観察し、波及における線状的隣接性条件を提案する。4節では、本稿の提案が日本手話の空目的語構文の分析にどのような示唆を与えるかを検討する。5節は、本稿をまとめる。

2. 日本手話の基本特性

2節では、本研究に関連する日本手話の基本特性をまとめる。まず、日本手話は主要部後置言語の一つで、基本語順はSOVであると言われている(2)。話題要素がある場合は、話題化を示す非手指標識(目の見開き・眉上げ・話題の終わりのうなずき(顎引き))を伴って、文頭に現れる。

- (2) (_____{TOPIC}) _____{NM}丁寧
佐藤 昨日 丁寧 車 洗う PT_{佐藤}
'佐藤が(／は)昨日丁寧に車を洗った'

次に、日本手話では、文頭へのかき混ぜが起こらないこともよく知られている(3-4)。⁴話題化された主語の／佐藤／の前に、目的語(3)や修飾要素(4)を出すことはできない。

- (3) _____{TOPIC} _____{NM}丁寧
*PT 車 佐藤 昨日 丁寧 洗う PT_{佐藤}
'この車を佐藤は昨日丁寧に洗った'

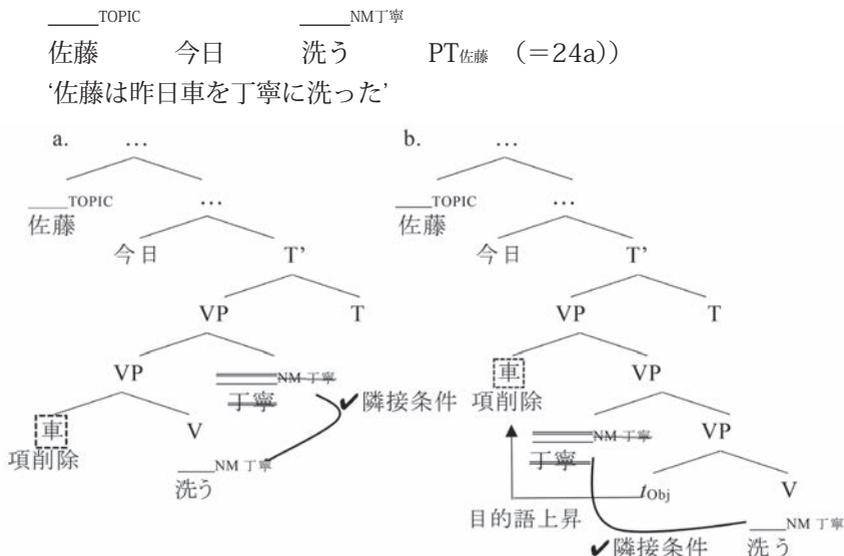
- (4) _____{NM}丁寧 _____{TOPIC}
*丁寧 佐藤 昨日 車 洗う PT_{佐藤}
'丁寧に佐藤は昨日車を洗った'

- (24) a. _____^{TOPIC} _____^{NM丁寧}
 佐藤 今日 洗う PT_{佐藤}
 ‘佐藤は今日車を丁寧に洗った’（解釈に‘丁寧に’の意味が、含まれる）
- b. _____^{TOPIC}
 佐藤 今日 洗う PT_{佐藤}
 ‘佐藤は今日車を洗った’（解釈に‘丁寧に’の意味が、含まれない）

3節で提案した線状的隣接性条件に従えば、(24a, b) の解釈の違いが示すことは、(24a) では、VP様態副詞が動詞句構造中に存在しているが、ただし、その手指形態素の音韻素性はゼロ形である一方で、(24b) では、動詞句中にVP様態副詞は含まれていないということである。(24a) では、副詞が存在しているからこそ、非手指拘束形態素が動詞に波及して外在化している、ということになる。同時に、この(24a) の発話においては目的語が空になっている。この事実を分析するには、2つの可能性：(A) 項削除分析あるいは(B) VP削除分析が考えられる。まず、(A) 項削除分析では、動詞句内の要素のうち、VP様態副詞の手指形態素は音韻素性がゼロ形で、非手指形態素はその拘束形態素としての特性により、単独では現れ得ないため、動詞との線状的隣接性条件を満たした上で動詞に波及され、外在化されて、目的語のみが項削除される。⁶ここでは、さらに3節で見た副詞の付加方向に関連して、2つの派生の可能性が考えられる(25a, b)。この場合、動詞が動詞句より高い位置に移動しているかいないかは、現段階では定かではない。

(25) (24a) の派生可能性 (A): 項削除分析

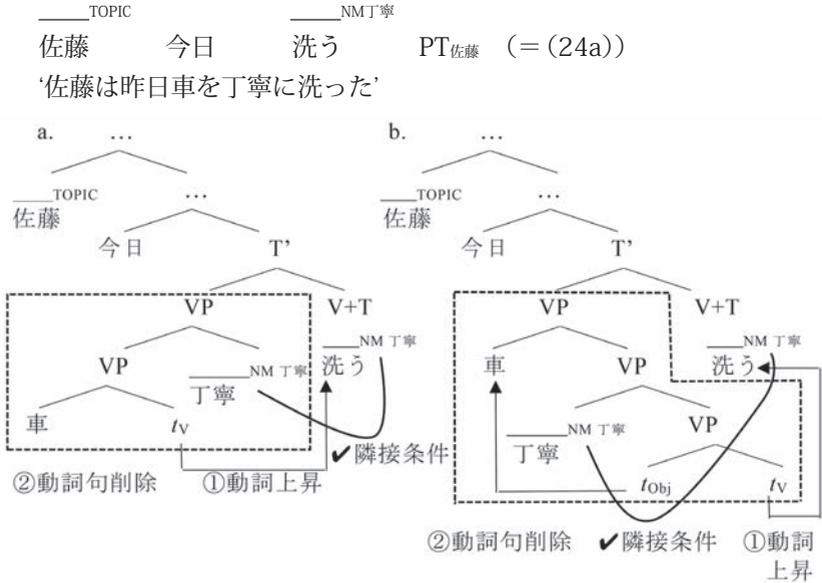
／洗う／＝語彙動詞 → 動詞にVP様態副詞の非手指要素が共起&VP様態副詞の解釈が含まれる



もう一つの分析可能性としては、(B) V-T主要部移動+動詞句削除分析：VP様態副詞と目的語も全て含めて、動詞句が一括で削除されている派生である(26)。(24a)では、動詞は残留しているので、動詞句削除が適用されるとすれば、その前に動詞は、動詞句の外に移動していると仮定する必要がある (V-T主要部移動)。いわゆる、動詞残留型動詞句削除分析 (V-stranding VP ellipsis: VSVPE) と言われる分析である (日本手話のVSVPE分析に関してはSakamoto and Matsuoka (2016) 参照)。⁷

(24a) の派生可能性 (B) : (動詞残留型) 動詞句削除分析

／洗う／ = 語彙動詞 → 動詞にVP様態副詞の非手指要素が共起&VP様態副詞の解釈が含まれる



以下では、(24a) の派生に対しては可能性 (A) の項削除分析 (25) が妥当であることを示す事実を示し、検討していく。また、可能性 (B) の動詞句削除分析 (26) は、(24a) のような語彙動詞が残留している時には当てはまらず、代動詞の場合においてのみ適用できることを指摘する。すなわち、語彙動詞の場合でも日本手話では、動詞のV-T移動は生じないと主張する (Cf. Sakamoto and Matsuoka (2016))。

では見ていこう。文脈 (22) および先行文にあたる (23) ((27)、(28) として再録) の後に続けて、(28) の語彙動詞／洗う／を、代動詞／やる／に変えた文 (29) を発話した場合、どうなるだろうか。驚くべきことに、VP様態副詞の非手指要素が代動詞／やる／に波及していなくても、解釈に／丁寧に／が含まれる読みが許される。

(32) a. 語彙動詞 (= (24b))

____ TOPIC

佐藤 今日 洗う PT_{佐藤}

‘佐藤は今日車を洗った’ (解釈に ‘丁寧に’ の意味が、含まれない)

b. 代動詞 (= (29))

____ TOPIC

____ NEG

佐藤 今日 やる⁹-ない

意味2 = ‘佐藤は今日車を丁寧に洗わなかった’

(解釈に、 ‘丁寧に’ の意味が、含まれる)

もし、語彙動詞が、代動詞／やる／と同じように動詞句より高い位置に構造上存在し、VP様態副詞と目的語を含む動詞句削除が生じているとすれば、動詞にVP様態副詞の非手指形態素が波及していなくても、動詞句削除によって、(32b) (= (29)) の意味2と同様に、副詞を伴う解釈が可能なはずである。しかしながら、事実は、語彙動詞においては副詞を伴う解釈は不可能である。つまり (32a) では、語彙動詞／洗う／は、VP削除が可能ない動詞句の外には存在していないということである。／洗う／などの語彙動詞は、非手指形態素の波及がなければVP様態副詞の解釈を含むことはないということは、／洗う／などの語彙動詞は動詞句内に留まっていると考えざるを得ない。また、動詞句内に存在する動詞が残されているということは、項のみが削除される項削除分析を仮定せざるを得ない。従って、上で検討してきた語彙動詞における空目的語構文 (24a) の派生は、(25)、すなわち (A) 項削除分析が妥当であると言える。

以上を踏まえた上で、さらに、非手指形態素の動詞へ波及に関して、以下のような示唆も得ることができる。もし線状的隣接性条件だけを満たせば波及が許されるならば、(29) 代動詞／やる／の場合、VP様態副詞が動詞句の右に付加していれば、動詞句削除の前に条件を満たしているため、副詞の非手指形態素が波及するはずである。その後、VP様態副詞と共に動詞句が削除されても、代動詞の上に波及した非手指形態素は削除領域の外に存在するはずだ (33)。

- (35) VP様態副詞の非手指形態素の外在化における構造的階層性条件
VP様態副詞の非手指形態素の動詞への波及は、VP様態副詞が動詞よりも構造的に高い位置にいないなければならない。

言い換えると、VP様態副詞が動詞よりも構造的に高い位置にあれば、副詞の非手指形態素が動詞へと波及できる。代動詞／やる／は構造的に動詞句より高い位置にあるため、この構造的階層性条件を満たさない。従って、VP様態副詞からの非手指形態素の波及は生じないと考えられる。

最後に、上記議論を踏まえ、3節で保留していた(21b)と(21c)の副詞の非手指形態素の動詞への波及を伴う文の派生の可能性について触れておく。本稿の分析からは、波及における線状的隣接性条件(16)および構造的階層性条件(35)から鑑みて、日本手話の語彙動詞はV-T主要部移動を生じていないということから、(21b)(=14)および(21c)(=(7)、(18))の文においては、いずれも目的語上昇の関わる(17b)および(19b)の派生がそれぞれ妥当であると示唆される。¹¹

5. おわりに

本稿で観察したVP様態副詞を含む動詞句内の要素間の語順と解釈をめぐる事実は、日本手話における削除現象の統語分析に際して、VP様態副詞の非手指形態素の波及の条件を考慮に入れる必要があることを示している。本稿で提案した、波及に関する線状的隣接性条件(16)と構造的階層性条件(35)が妥当なものだとすれば、現時点では以下の結論が導かれる。すなわち、日本手話のVP様態副詞を含む動詞句内に現れる空目的語は、動詞が語彙動詞である場合は項削除によって派生され、動詞が代動詞／やる／の場合は動詞句削除によって派生されるものである。また本稿の分析から、少なくともVP様態副詞の関与する文において、日本手話の語彙動詞はV-(Neg)-T主要部移動は起こしていないことを主張することとなることも示唆された。

謝辞

本稿に関連する日本手話のデータ調査にご協力いただき、また有益なコメントをいただいた日本手話母語話者の皆様に深く感謝申し上げます。また、阿

部潤、浅田裕子、岩部浩三、遠藤喜雄、太田聡、岡典栄、北原義嗣、川崎典子、坂本祐太、武本雅嗣、豊島孝之、長谷川信子、藤巻一真、松岡和美、山下秀哲、和田学の諸氏ならびに東京手話言語学研究会（TOSLL）、生成文法研究会（Seeking a Genuine Explanation）、山口大学英语学研究会、日本言語学会第158回大会（2019年6月22日於：一橋大学）参加者の皆様に、本研究への貴重なご意見をいただきましたことを感謝申し上げます。また、本稿執筆にあたり、ご助言をいただきました2名の査読者に心より感謝致します。

最後になりましたが、長谷川信子先生の神田外語大学大学院でのこれまでの熱い研究指導と故井上和子先生より引き継がれたCOE（卓越した研究拠点形成プログラム）時代にいただきました様々な機会と経験、そして先生からのお教えは、現在の私どもの研究者として、教育者としての礎となっております。心より感謝申し上げます。

謝辞

本研究は、JSPS科研費JP17K02691（研究代表者：内堀朝子）およびJSPS科研費JP18K00576（研究代表者：上田由紀子）の助成を受けて実施した。

本稿は、日本言語学会第158回大会での口頭発表原稿に加筆、修正を加えたものである。

注

- 1 手話言語において、日本語訳の‘丁寧’にあたるような様態副詞的機能を持つ手話表現を「副詞」と呼ぶべきか否かは慎重な議論を要するところである。本稿では、便宜上また紙面の制約上「VP様態副詞」と呼ぶこととするが、正確には「VP様態副詞的修飾表現」を意味する。なお、本稿の例文には、RS（Referential Shift）（特に、動詞句内に現われると想定される行動RS）は、生起していない。
- 2 / _____{TOPIC} / は、話題化を表す非手指標識を表す。(1) では、主語の / 佐藤 / が話題化される場合、その手指表現 / 佐藤 / の上に非手指標識の / _____{TOPIC} / が表示されている。この表示は、 / 佐藤 / という手指表現と同時に、話題化の非手指標識（目の見開き、眉上げ、話題の終わりのうなづき（顎引き）が生じていることを示している。
- 3 PTは「指さし（Pointing）」を表し、文末に位置する指さしを「文末指さし」と呼ぶ。(1) では、文末指さしとして、話題要素 / 佐藤 / を指示する指さしが現れている。文末指さしは、一文の終わり（言い切り）を示し、指示対象は、主語または話題要素（時間表現を除く）であるとされている（Uchibori（2016）、市田（2005）、岡・赤堀（2011）、原・黒坂（2013）、鳥越（1991）など）。

- 4 日本手話の語順に関する事実は複雑なところもあり、さらなる観察が必要である。
- 5 音声日本語における副詞の単独削除の可否に関しては、Oku (1998) を参照されたい。
- 6 本稿においては、空要素の意味解釈と派生に関し、PF削除で派生されるのか、LFコピー分析で派生されるのか、また、先行文 (22) との構造的並行性についての議論は、今後の研究に委ねることとする。音声日本語からの削除構文研究に関しては、Otani and Whitman (1991)、Saito (2007)、Takahashi (2008a, b)、高橋 (2013)、Funakoshi (2016)、Sakamoto (2016、2019) ほかを参照されたい。
- 7 Sakamoto and Matsuoka (2016) は、日本手話の空目的語を伴う文において、手指表現のみに注目し分析を行い、動詞残留型動詞句削除分析を支持する主張を行っている。本稿は、Sakamoto and Matsuoka (2016) が扱っていない、非手指表現の特性から、日本手話の削除構文の分析可能性を探求する試みを行っている。本稿はこの点で、音声言語における削除構文研究では見えてこない、手話研究ならではの特性を活かした、削除構文研究となっている。
- 8 /やる/は、語彙動詞としても用いられる。例えば、/スポーツ やる \overline{PT}_2 / ('友達などと遊ぶときの誘い文句として) スポーツやる?) など。
- 9 音声日本語の*su-*の挿入の要請については、Fujii (2016) を参照されたい。Fujii (2016) では、*su-*挿入を単なる形態論的な要請によるものに留めず、EPP素性の要請に還元する主張を行っている。
- 10 Negは主要部移動を起こして、Tまで上昇し、そこで、/やる/挿入が生じる可能性もあるが、日本手話における主要部移動に関してのより詳細な観察と分析は今後の研究に委ねることとする。
- 11 本稿では、議論をわかりやすくするため、ラベル付けを含め、 vP 内での詳細に触れることがない限りにおいて、 v を含め、動詞句内の詳細は簡略化したVP表記をあえて採用した。長谷川信子氏より (21b) に対しての派生 (17b) および (21c) に対しての派生 (19b) に関し、 v を導入し、目的語に対する格与値を考えると (17b) および (19b) の派生は、当然の帰結になるのではないかのご指摘をいただいた。当初、我々もこの目的語上昇をラベル付けのための移動 (Chomsky 2015) と考えられなかったかと考えた。Chomsky (2015) に従えば、動詞主要部R自身のラベル付け能力の不完全性から、素性共有でのラベル付けのために、目的語はVP-Specへと移動する。格は、この一致の副産物として、値が付与される。しかしながら、(17b) および (19b) において、VP様態副詞の非手指標識の動詞波及がなければ、目的語は移動する必要はなく、副詞—目的語—動詞の語順も許される。すなわち、この目的語上昇は任意な移動である。任意な移動であることを考えると、ラベル付けのための移動とは捉えにくいと考えた。

また、Chomsky (2015) で提案されたラベル付けアルゴリズム (LA) の枠組みからすると、人間言語は解釈のために、LAに従って、ラベル付けされなければならないとす

れば、日本手話は、一致形態素が動詞に現れることがないばかりか、Case-particlesも持たない言語であり、語順も音声日本語のように自由ではないと言った点で、考慮すべき点が多くある（Case-particlesを持つ音声日本語のLA分析については、齋藤（2013）を参照）。長谷川信子氏からのご指摘にあるように、フェイズ主要部である v を導入した上で、副詞的要素の併合の種類やタイミングなどの可能性を丁寧に検討していく必要がある。

また、本稿が観察してきた日本手話における同時外在化特性自体が言語モデルの中でどのように捉えられていくべきか、今後の課題としたい。

参考文献

- Chomsky, Noam. (2015) Problems of projection: Extensions. In *Structures, strategies and beyond: Festschrift in honour of Adriana Belletti*, ed. Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 1-16. Amsterdam: John Benjamins.
- Fujii, Tomihiro. (2016) V-raising, *su*-insertion, the stranded suffix filter, and economy of derivation. *Nanzan Linguistics* 11: 1-14.
- Funakoshi, Kenshi. (2016) Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 25: 113-142.
- 原大介・黒坂美智代. (2013) 「日本手話の文末指さしが指し示すものは何か」. 日本手話学会第39回大会（三重大学）口頭発表.
- 市田泰弘 (2005) 「手話の言語学 (6) 空間の文法—日本手話の文法 (2) 代名詞と動詞の一致」. 『月刊言語』 34-6: 90-98. 大修館書店.
- 松岡和美. (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』. 東京: くろしお出版.
- 岡典栄・赤堀仁美. (2011) 『文法が基礎からわかる日本手話のしくみ』. 東京: 大修館書店.
- Oku, Satoshi. (1998) *A theory of selection and reconstruction in the Minimalist Program*. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs, USA.
- Otani, Kazuyo, and John Whitman. (1991) V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22: 345-358.
- Saito, Mamoru. (2007) Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43: 203-227.
- 齋藤衛. (2013) 「日本文法を特徴づけるパラメーター再考」. 『言語の普遍性および多様性を司る生得的制約: 日本語獲得に基づく実証的研究』報告書, 1-30. 国立国語研究所・南山大学.
- Sakamoto, Yuta. (2016) Phrases and argument ellipsis in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 25: 243-274.
- Sakamoto, Yuta. (2019) Overtly empty but covertly complex. *Linguistic Inquiry* 50: 105-136.
- Sakamoto, Yuta, and Kazumi Matsuoka. (2016) Missing objects in Japanese Sign Language,

paper presented at WAFL 12. Central Connecticut State University, USA.

- Sandler, Wendy, and Diane Lillo-Martin. (2006) *Sign language and linguistic universals*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Takahashi, Daiko. (2008a) Noun phrase ellipsis. In *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, ed. Shigeru Miyagawa, and Mamoru Saito, 394-422. New York: Oxford University Press.
- Takahashi, Dariko. (2008b) Quantificational null objects and argument ellipsis. *Linguistic Inquiry* 39: 307-326.
- 高橋大厚. (2013) 「主語・目的語省略の比較統語論」. 『言語の普遍性および多様性を司る生得的制約: 日本語獲得に基づく実証的研究』報告書, 1-22. 国立国語研究所・南山大学.
- 鳥越隆士. (1991) 「日本手話の文末の位置について」. 『手話学研究』 12: 15-29.
- Uchibori, Asako. (2016) What does clause-final finger pointing refer to in JSL? The 5th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, September 25, 2016, National Museum of Ethnology, Japan.
- 上田由紀子・内堀朝子. (2019) 「日本手話における非手指副詞, 動詞, 目的語の語順について」. 日本言語学会第158回大会 (一橋大学) 口頭発表.